

話題

第74回(2019年)年次大会

中西 秀¹ (九州大学理学研究院)

プロローグ

開催依頼が来たのは今から約2年半前、九州支部長宛であった。2019年か2020年の年次大会を九州地区の何処かで開催できないかとのこと。「九州地区の何処か」ということであるが、九大で引き受けてほしいということであろう。もちろん、準備の労力を考えると諸手を挙げて歓迎とはいかない気持ちも心の片隅にあった。しかし、前回の九大での大会から10年以上たち、九州地区の拠点大学としては逃げることはできない²。また、ちょうどその頃には、九大箱崎キャンパスの伊都地区への移転も完了するので、新キャンパスのお披露目という意味でも、絶好の機会である。学会事務局もいいところをついてきている。ここはなんとかしても引き受けなければ、

受諾

年会には数十もの様々な大きさの教室が必要だ。九大といえども、まだ移転が完了していない段階で³、それだけの会場が使えるかはわからない。早速、教室のリストを出して検討してもらった。全学教育の教室を中心に、理学部、工学部を加えて、更に、椎木講堂や稲盛会館などの学内施設を合わせると、なんとか間に合いそうだ。

ところが、ここで難問が生じた。教室使用料である。新キャンパスということで箱崎のときよりも高めに設定されているのか、使用料を計算してもらおうとざっと400万円。学会事務局からはとても払える額ではないとのこと。

しかし、ここで諦めてしまえば、九大で物理学会は永遠に開けなくなってしまう。九州大学の学会への貢献という意味でも問題だし、何よりも、

全国の学会員や福岡市民に九大の新キャンパスをアピールする絶好の機会を逃してしまう。そこで、ある大学理事からの提案もあり、物理学会開催のために協力していただきたい旨、大学総長あてに要望書を出すことにした。その結果、年次大会を伊都キャンパス完成事業として九大共催にしてもらい、更に、ジュニアセッションを稲盛財団に共催していただき、様々な形で使用料を配慮してもらって、実質300万円以下で借りられる目処がたった。また、福岡観光コンベンションビューローからの助成金もあり、なんとか学会を引き受けられることとなった。

準備開始

伊都キャンパスでの大規模学会開催の一番のネックは、都心からの交通問題だ。宿泊施設は市の中心部の博多・天神地区に限られているので、数千人に及ぶほとんどの参加者は、そこから約1時間かけて伊都キャンパスまで毎日通うことになる。通常の学期中も、それ以上の学生・教職員が伊都キャンパスに通っているが、学生の多くは大学周辺に住んでおり、事情が異なる。また、人の動きも通常とは大きく異なるため、輸送力がそれに対応できるか心配だ。

都心から伊都キャンパスへのアクセスには大きく分けて2つのルートがある。まず、博多駅から天神経由で伊都キャンパスへ、直通の西鉄バスが出ている。一度乗ってしまえば乗り換える必要がないので、通常はこれが便利だ。もう一つは、地下鉄・JRで九大学研都市駅まで行って、そこから昭和バスに乗って伊都キャンパスまでゆく方法。これは、多くの学生・教職員が普段から利用しており、通勤・通学時間帯には学研都市駅からかなりの頻度でバスが出ている。

宿泊地の博多天神地区からは直通の西鉄バスが便利そうだが、問題は便数がそれほど多くはないことだ。西鉄バスに増発を交渉したが、ドライバー不足と博多駅のターミナルの容量から、早々に断られてしまった。参加者を地下鉄経由のルートに誘導するしかなさそうだ。

以前に伊都キャンパスで開かれた工学系の学会では、多くの参加者が西鉄バスに殺到したため、乗れない人が多数出たということを伝え聞いた。そのため、午前のセッションの開始に間に合わない座長や発表者が続出したそうだ。

¹実行委員長

²前回九大で物理学会を開催したのは2004年で、それまでもほぼ十数年毎に九大で開催して来ているようだ。

³2016年の段階では、文系学部と農学部がまだ箱崎に残っていた。

更に学会直前に明らかになってびっくりしたのは、学研都市駅からの昭和バスのデータがネット上で検索できず、GoogleやYahooなどのルート案内で博多天神から九大伊都キャンパスへのルートを検索しても、西鉄バスの直通ルートしか出てこないことである。検索できないものは存在しないも同然、これでは多くの参加者が西鉄バスに殺到するのは目に見えている。某工学会の二の舞になってしまうのではないか！これはなんとしてでも避けなければ。

そこで、大会のホームページの冒頭にアクセスについての注意を大きく乗せるとともに、学会直前に参加者に対して注意を喚起するメールを出すことにした。後で、知人の参加者に聞いたところ、直前のメールは記憶に残り、効果があったようだ。

会期中

学会事務局の人の話によると、学会の印象は会場へのアクセスと昼食の行列で決まってしまうとのこと。今回もこの2つには神経を使った。

アクセス 上に述べたように、準備段階から地下鉄・JR 経由で学研都市駅から昭和バスに参加者を誘導するように気を使ってきたが、実際にどうなるかは確信が持てなかった。バスは大学の春休み中の3月も学期中のダイヤでの運行しており、駅からは通常の通勤通学時間帯に合わせてかなりの便が運行している。しかし、学会参加者の時間帯と微妙にずれているかもしれないし、慣れない乗客が多いと、特に初日は混乱する可能性もある。

学研都市駅には、昭和バスと旅行業者の担当の方が誘導にあたってくれるとのことであった。それに加えて、実行委員の先生も朝の時間帯に張り付いてくれた。事前にはバスの増発はドライバー不足から難しいとのことだった昭和バスも、隣県の佐賀営業所からの応援で、状況に応じて臨時バスを出してもらうことができた。その結果、一時的に行列が数百人に達することもあったようだが、バスがほぼ切れ目なく運行していたこともあって、大きな混乱は回避された。

博多からの直通の西鉄バスは、時間帯によってはすいていてそちらのほうが快適そうにも見えた。しかし、朝夕の参加者の移動する時間帯にはかなりの混雑になり、一時間もの間満員のバスに乗り

合わせた方は結構大変だったのではないか。地下鉄経由への誘導方針は、正解だったと思う。

セッションが終わる午後4時過ぎから6時過ぎまでのキャンパスからの輸送も、昭和バスからは、誘導體制をしっかりとっていただき、臨時便も出してもらった。一時的に二三百人の行列ができたが、それほど大きなストレスなく帰っていただくことができたようだ。

交通についてヒヤリとしたことは、大会初日の午後、クレーン車の接触事故があって、一時、JR 筑肥線が止まったことである。もし、筑肥線が長時間不通になってしまったら、都心との交通手段は非常に限られてしまう。その日、参加者がホテルに帰るのも大変だし、2日目からの大会運営が危ぶまれる事態になっただろう。幸いにも、30分程度で復旧して、実行委員一同胸をなでおろした。

昼食 学会中の昼食はいつも問題だ。短い昼休みに多数の参加者が食堂に殺到して、長い行列ができてどこが行列の最後尾かすらよくわからないという経験をした人も多いだろう。伊都キャンパス周辺には一般の食堂は殆どない。しかし、キャンパス内に関しては、大人数に対応できる食堂が複数あり、幸い土日も含めて開業してくれることとなった。また、それでも不足する場合に備えて、弁当業者に販売を依頼していた。その結果、ほとんどの方には比較的スムーズに食事をしていただけたようだ。ただ、反省点もいくつかあった。

一つは、生協食堂の混雑を緩和するために、普段から九大で食事を提供している別の業者に弁当販売を依頼した。ところが、初日、お昼になっても一向に弁当を販売している気配がなく、昼食担当の実行委員を大いに困惑させた。後でわかったことだが、九大内の業者間の申し合わせで、生協食堂付近では他の業者は弁当を販売しない事になっていたこと、また、弁当販売に関しては生協食堂の状況を見て判断することとしていたとのことであった。このような、業者間の棲み分けには微妙な点もあるようで、実行委員にはなかなか情報が伝わらず、ヤキモキさせられた。

もう一つは、人の動きについてだ。センター地区の一番大きな食堂には、1階のフロアー以外に、学期中のお昼だけ営業する地下のフロアーがあって、そちらのほうが座席数が多い。学会開催中はそちらも利用できるようにお願いしていた。ところが、12時になっても地下フロアーにはほとんど利用客が来ず、食堂担当責任者の判断で一部の職

員を帰してしまっていたとのこと。その結果、多くのセッションが終わる 12 時過ぎから急速に増えた利用者を地下フロアーに誘導した際に、若干混乱が生じた。学会開催の際には、通常の学期とは微妙に異なる時間帯に急激に人の移動が生じるが、その事前の打ち合わせが不足していたために起こった混乱だった。

また、地下食堂については、誘導にも若干問題があった。地下食堂は通常お昼休みしかオープンしていないせいか、地下フロアーへの案内表示がまったくない。我々九大職員は、毎日利用しているため、ほとんど意識していなかったが、外部の人にとっては地下食堂の存在すらわからない状況であった。生協の職員の方に急遽案内表示を準備していただいたが、外部の人の目から案内表示がどうなっているのかを意識するのは難しいと実感した一件だった。

起こりうる事

年会の始まる 2～3 日前に、実行委員長の心構えとして、最悪の事態としてどのようなことがありうるかを考えてみた。4 日間で数千人の人が集まる集会だ。個人のレベルでは千回に一回しか起こらないようなことが起こっても不思議はない。私がこれまで出席した学会は、学生時代から数えておそらく 50 回ぐらいで、少なくはない。しかし、千回学会に出席して初めて起こるようなことに何がありうるか、なかなか想像できない。インフルエンザを発症して会場で嘔吐するとか、階段から転げ落ちて骨を折るなど、

そんな事を考えていたら、学内のいたるところに設置されている AED（自動体外式除細動器）に目に止まった。学会で AED が必要な状況が起こる確率がどのくらいなのか見当もつかないが、例えば数万人が参加する市民マラソン大会などでは、そういうこともあるらしい。学会の実行委員・アルバイトを対象に使用法の講習会をするのも良いかもしれないと思って調べてみると、講師を派遣している団体があることがわかった。しかし、すでに大会直前で、残念ながら講習会を計画するには少し遅すぎた。

学会会期中に AED が必要になる事態が生じる確率はそんなに大きくないのかもしれない。しかし、これだけいたるところに設置されている装置である。誰でも一度ぐらい、使用法の講習会を受

ける価値はあるように思う。もう少し早く気づいていれば、学会開催は講習会をする良い機会だったかもしれない。

エピローグ

大会 2 日目に中に、物理学会長から実行委員会に 10 万円が贈呈された。これを何に使うか、少し悩ましかった。今回の実行委員会は 31 名なので、一人あたりにすると 3000 円ちょっと、少ない額ではないが一人ひとりに配るわけにも行かない。結局、パッと使ってしまうのが一番良からうということで、これで最終日の後片付けが終わったあとに打ち上げの会をすることにした。実行委員、学生アルバイト、それに学会事務局の方を合わせて数十名で、スパークリングワインで乾杯、軽くおつまみをつまんで 1 時間ちょっとでおしまい。ちょうど 10 万円の予算。肩の荷も降りて、非常に気持ちの良い会だった。

最後になりますが、手取り足取りのサポートをしていただいた学会事務局の方々、実際の仕事をしてくれた副実行委員長以下実行委員諸兄姉、当日の実行部隊の手足となってくれたアルバイト諸君、その他学会開催に協力していただいたすべての方に、感謝します。